

記念講演



少子社会の人間学

～夫婦仲が悪いと子どもがキレる～

群馬県立女子大学学長 富岡賢治

今、群馬学というのを作ろうとしています。今度、県立女子大学で新しい英語漬けの学部を作ろうと思っています。そこで英語を使って国際環境の勉強をさせるだけではなく、日本の文化を勉強してもらおうと。さらにあわせて群馬のことについても勉強してもらおうということで、群馬について何を勉強するかと知恵を出したら、県外出身の大学の若い先生が群馬は面白いところだということです。私も高校までは群馬におりまして、30 数年間、群馬の仕事はしませんでした。最近面白いと思うようになったのです。

20 数年前に、読売新聞と群馬大学が一緒になって、群馬県の人に群馬にはどういう特色

があるかと聞いたところ、圧倒的に、1位は空っ風、2位はかかあ天下、ずっと落ちて上毛三山でした。また群馬県人の特色は、気が短くて、熱しやすく冷めやすい。そして義理堅いという意見が圧倒的でした。さらに群馬県の代表的な人は、国定忠治が50%、感心なことに10%が新島襄でした。そして中曽根先生、福田先生となりました。

それは最近のことではなくて、昔から群馬は同じ特色を持っているのです。義理堅い、熱しやすくまとめられているのです。山をバックに関東平野に開いているので、すぐに暴れるが収まるのも早いと書いてありました。東京の人は群馬県に行くというと、なだれに気をつけてといえます。若い先生方が言うには、言語学的に言うと群馬県は特異な言語体系を持っていると。裏日本と表日本のちょうど十字路にあたるということです。私は方言を持っていないと思っていたら、群馬県人は「自分は方言を使っていない」と思っている最も典型的な県人だそうです。中仙道、中学校、と言うときのアクセントも違います。

言語学的には面白い地域だそうです。また文化財も埴輪や木管など奈良の文化財の比ではないそうです。文学では群馬県は終始一貫、短詩系だということです。萩原朔太郎や土屋文明など、長文の文学がないということです。それはなぜかということで、群馬学を面白いといってくれる人が多いのです。経済学もそうです。

経済界ではなぜ群馬県人と新潟県人が多いのか。昔、田中角栄氏が高崎駅の駅長室でお茶を飲んだときに、高崎田町の商店街はみんな新潟県人だぞと言ったそうですが、本当ですかね？ それは経済学からいうと、群馬は開放型の風土を持っているのではないかと。

群馬学学会というのを作って知的な結集をはかろうと思っています。共通しているキーワードは、群馬というのは、異文化共存型開放型社会なのです。常に群馬は小さな藩が沢山あったし、交通の要地といわれていますが、滞在型の交通の要地、中仙道や日光街道も異文化を持った人間が滞在していたことから、異文化が共存していたのではないかと。開放型はそういう人たちが一緒になってやっていたと。経済的にもまあまあでしたし。米に頼りすぎていない、繭などは現金商売をしていたということです。ということで、開放流通型ではないかと思うのです。そういうことで、群馬学を確立しようと思っていますので、皆様方もぜひ参加してください。

今、何が教育の最大の問題かという話をしたいと思います。今の問題といえば、教育基本法の改正問題ですか、違いますよね。何が問題か？ それは日本の子どもが勉強する気が全く無いということなのです。最大の問題は子どもの学習意欲がないということです。統計をみてもわかります。今、勉強していることが将来役に立つか、という質問を繰り返すと、アメリカの子どもは勉強ができなくても、将来役に立つと思っているのです。日本の子どもは、切羽詰らないとやらない。勉強しなくてはいけないという切羽詰った目標が持てないのです。日本の社会は子ども達が自分の夢を持ちにくい社会なのだと思います。



なぜそうなのか、勉強しなくても食べて行けるし、目標となる人物像が浮かばないのだと思います。小学生に将来どんな職業に就きたいかと聞くと、昔から終始一貫変わらないのが、スポーツ選手かタレント。2番手に企業の経営者、弁護士、医者。そこそこ勉強して頑張ってる職種。3番手になるとこれは明治から同じの、先生、保育さん、看護師。今は政治家になろうという人がいないのです。高級官僚もいません。最近は企業家も、建築家も夢のある事業ではなくなったのです。良いイメージがなくなってしまったのです。お父さんのようになれよ、なんていえる人はいないでしょう。だから頑張ってやるということがなくなってきたのです。勉強する意欲がなくなってきたのです。

4年前、文部省の局長時代に3ヶ所で連続して教育問題の講演したあとに、同じ質問を受けたことがあります。3会場でシーンとした同じ質問がありました。「富岡先生に聞きたいのですが、うちの子どもに勉強しろといったら、これが親の仇を見るような目で見ると、いろいろ言っても聞く耳を持たない。富岡先生ならどう言いますか？」と。私も苦労しましたと話したところ、その人は座りながら、「同じ答えで安心しました」と言いました。みんなが知りたいことというのは、そんなことです。学校の先生に聞いても、「そんなことはこっちが聞きたい」といいます。

それで私は国民が知りたいことを研究しようと思い、子どもはどういうときに勉強しようと思うかを調査しました。2つあって、東京の郊外と岐阜県の本人と親と担任に、アン

ケートしてヒヤリングもしました。お母さんは全く効果がありません。いつも逃げているお父さんに効果があるかという、全く関係がありませんでした。では何が関係しているか、一つは徹底的に子どもの良いところを褒めること。平均点より下の得点を持ってきたら褒める人は殆どいません。それを褒めるのです。今、日本の子ども達は甘えているといいますが、そうではないのです。何故かという、褒めるというのは相手を好意的に見ていないと駄目なのです。

日本の親は国際比較調査によると、自分の子どもに満足しているかと聞くと、アメリカや韓国でも8割の親が満足しているのです。日本は2割の親しか満足していないのです。では子ども達はどうか、君は自分のことをどう思っているか、アメリカの子どもは、僕は勉強できないけど走るのが速い、とか、自分が一生懸命やっているということを8割の子が思っているのです。日本の子どもは2割しか自分を良い子だと思いません。それはそうです。2割の親が駄目な子だと思っているのですから。そういう親が子どもを褒めても駄目だと。普段から子どもの良いところを褒めてあげるので。高橋尚子もそうです。褒め方も白々しく褒めたのでは駄目なのです。

子どもはどういう褒め方が嬉しいのか。「ディズニーシーに連れて行ってやる」なんていうのは駄目で、普段いい加減なカレーライスを作っていた母が手の混んだカレーを作ってきたというのが嬉しいそうです。子どもというのは実にいたいけないものです。本気で褒めるということです。親でなくても良いそうです。地域活動をやっている先輩が、お前なかなか頑張っているなという頑張りそうです。自分の部下を褒めるということと、怒ることのどちらが多いですか。私の経験からいうと、100回中90回は怒るけど、褒めるのは3~4回です。

2番目は学校の授業がわかる状態が続いていることが、やる気が出るというのです。考えてください。毎日8時半から午後3時まで学校にいるのですから、授業がわからないでは嫌になるに決まっています。授業がわかる状態だと自信を持つそうです。皆さんは、教師はたいした職業ではないと思っているでしょうけど、案外大事なのです。だから学力低下問題がありますが、企業の偉い方は、日本の教育が心配だと思える人が多いと思いますが、それは間違いです。今は七五三教育といって、小学生の7割、中学は5割、高校は3割の子しか授業についていけないのです。しかし文部省が調べたら、5割、5割、6割で半分の子は授業をわかっていない状態なのです。だから10教えて5しかわからない子どもには、ゆっくり8を教えて5を6にした方がいいかというその政策問題なのです。メディアや大学教授や企業の一線働く人達は不満でもっとレベルを上げろといいますが、わからない人にレベルを上げたら嫌になるに決まっていますもっと丁寧に教えなさいと。中には10教えたら12先にいく人がいたと思いますが、これは元々学校教育の体系の中で先に行っている人ですから、圧倒的に1000万人の子どもには丁寧に教えた方が良いでしょう。

褒められるというのは日頃から、そういう目で褒めない。また家庭環境を作っていないと駄目です。家庭がうまく行かなかつたら見て下さる地域の中に子どもを放り込めと

ということです。

キレルという状態ですが、普通の子どもが金属バットを持って突然キレて親を殴るなんてことはないと思います。そこで 800 件以上のキレている状態のケーススタディーをやってみました。本人からよく話を聞く。周りの家族から聞く。本人から聞くのは駄目なのです。頭が真っ白になるそうなんです。外から当たって見たところ、家庭教育相談をしている人に協力をお願いしてもイヤだといわれたのですが、お子さんの育て方の経緯を聞いているうちに、私はこの子と心中するつもりですということです。だけど心中する前に亭主を殺してからだということです。

800 件の中で 2 つの共通点がありました。一つは家庭が暗いということ。多くの場合夫婦の中が悪いということです。すると子どもがキレル可能性が高いのです。しかし、夫婦仲が悪いと子どもがキレルから、離婚した方が良いとは文部省は書けない。家庭内緊張関係にあると子どもはキレると、訳がわからないでしょう。核家族で子どもがしつけられないと、でも大家族だと必ず人間関係が壊れちゃいます。嫁と姑のいがみ合いがずっと続くと、暗くなりキレやすい、家庭内緊張関係になるのです。

2 つ目は友達がいらないということです。友人関係で鍛えられることがないまま育ってしまうという人です。鍛えられる状況を作ることです。友達作りというのはテクニックでできるでしょう。夫婦仲が悪い場合は、それと別の人間関係に移すということです。「可愛い子どもには旅をさせろ」です。だから人間関係を沢山つくらなくてはならないのです。

私はそういうことを勧めようと、親から離して山の中で自然体験をさせたりする活動を全国で応援するようになりましたが、その他にも地域の商店で子ども達を働かせたりして、鍛えるようにしようとしています。

小学生が地域の商店街にお手伝いに行くことが全国で勧められていますが、一番進んでいるのが神戸です。ボランティア活動を普段からやっという事で、学校を 2 週間休みにして、その間授業扱いにして地域の商店街を手伝いに行くのです。群馬県でも一部やり始めました。最初は、通産省に子ども達のためにお願いしますといったところ、通産省の幹部が嫌だということです。そこで全国の商店街連合会に行って頼んだところ、やってくれることになったのです。朝 9 時に 5 人ぐらい子どもを商店街に連れて行って、各商店で 5 時ぐらいまで働かせて帰るだけなのですが、最後に商店主は「よく来た、よく頑張った」と言ってくれます。その時にちょっと 3000 円くらい渡してもいいのかなと商店街からありました。いいよと言いたくなりましたが、児童福祉法に引っかかるので、子どもの学校に寄付する形にしてもらいました。群馬県でもぜひやって下さい。それだけでも子どもを鍛えることになりますから。

参考までに、山の中に連れて行くということは、確実に子どもが変わります。一週間山に放り込めば、目が変わってきます。私は大阪の子どもを集めて愛媛県の無人島に 10 日間宿泊させました。15 歳ぐらいの悪い女の子が来ていましたが、10 日間後に母親が大阪空港に来たときに、これが同じ子どもかというくらい目の色が変わっているということです。

ロータリークラブでもそういう活動を支援していただければと思います。ありがとうございました。

【2004 年 10 月 23 日(土曜日)群馬音楽センター】